

島根県の砂浜海岸に生息するシロチドリ その生息数は推定できるか

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* は、ユーラシア大陸や北アメリカ大陸などに広く分布し、おもに海岸の砂地に営巣して繁殖する。日本においてもほぼ全国で見られるが、近年、個体数の減少についての報告例がいくつも見られるようになっており、都道府県版のレッドデータブックに掲載されているところも多い。島根県のレッドデータブック(2004)においても準絶滅危惧に指定されている。また、2012年に公表された環境省の第4次レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類として新規掲載された。

本種は、島根県においても一年を通して見られ、砂浜海岸や河口部の砂礫地などに生息しているが、県内の生息数についての情報は少なく、特に県内全域を対象としたまとまった記録は見あたらない。



そこで、2011年および2012年に本種の繁殖期にあたる5-7月に県内各所の砂浜海岸（29カ所、総延長約35km）を踏査し、実態調査を行った。その結果、海岸の距離と、繁殖する可能性があると考えられるつがいの数との間には正の相関があると考えられたほか、500m未満の砂浜ではつがいは確認できなかった。さらに、シーズン毎の違いや再現性を検証するために、2013年5-6月にも県内各所（前回調査と同じ27カ所のほか新規10カ所、総延長約43km）で改めて調査を行ったところ、ほぼ同様の結果が得られた。また、この時には営巣地点の砂浜の幅や巣間距離などを測定し、調査中に確認した44巣中30巣が砂浜の幅が30~70mの場所にあったことなど、本種の営巣地点選択の傾向として考えられることについて若干の知見が得られた。

本研究では、これらの結果を元に、2万5千分の1の地形図や島根県統合型GISから砂浜海岸の距離を読み取り、県内で繁殖していると考えられるつがいの数を推定した。海岸の距離や環境の読み取り方によって、その推定数にはある程度の幅があり、海岸の距離以外の条件の影響や、繁殖そのものの数としての検討、経年変化などについては今後の課題として残されたが、こうした具体的なデータによる生息状況の把握は、種の保護を考えていくためには重要なことと考えられる。

本発表の内、2011年の出雲市の海岸における調査結果は、出雲市「平成23年度自然環境調査報告書」によります。